



Title	池田哲郎著『アルタイ語のはなし』におけるモンゴル系諸言語の記述に関する問題点
Author(s)	角道, 正佳
Citation	大阪外国語大学論集. 2001, 25, p. 73-100
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79860
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

池田哲郎著『アルタイ語のはなし』における
モンゴル系諸言語の記述に関する問題点

角 道 正 佳

**On the Problems of Description concerning Mongolian Languages
in
*An Introduction to Altaic Languages***

KAKUDO Masayoshi

There are a lot of inadequacies and insufficiencies in the description of Mongolian languages in *An Introduction to Altaic Languages*. The most serious problem is the proto form of the first plural personal pronoun *bī + tā. This proto-form creates initial p in Shera Yogur, Monguor, Baoan, Dunshan and Kangjia languages, since the vowel of the first syllable is narrow and the onset of the second syllable is voiceless (or more accurately fortis). Of course this is not correct. Examples of inadequacies are descriptions such as the following.

The accent of Mongolian is fixed on the first syllable.

Shera Yogur, Monguor, Baoan, Dunshan languages have word final stress.

Dialects (or languages) with three vowel harmonic alternations have a linguistic contact with Manchu language.

These inadequacies originate from uncertain or insufficient descriptions of early studies, on which the author based. Recent studies and close examination of bare materials will give us a lot of precise and more accurate knowledge of these languages.

0. はじめに

池田哲郎著『アルタイ語のはなし』のはしがきによると、「トルコ、モンゴル、ツングースの人々を考察の対象とし、かれらの言語を考えてみたい。その言語は、どのような仕組みをもっているか？ その言語は、どのように人々に受け継がれたきたか？ その言語は、どのように他に係わってきたか？ これらが主題である」とある。すなわち、アルタイ共通祖語をたてることをめざしたものではない。三つの主題のうち、二つ目については特にコメントを付け加えることはない。三つ目の主題はモンゴル語に関する限り成功しているとは言い難い。最初の主題についてはきめの粗さが目立つ。トルコ、ツングースについては知識がないし、何よりも主体的に係わっていないので、コメントを加えることはしないが、モンゴル諸語についてはかなりコメントを加える必要がある。モンゴル文語、元朝秘史、ハルハ方言以外の

モンゴル諸語について、同書は特定の文献にのみ基づいて記述しているきらいがある。モンゴル諸語に関する記述は決して多いとはいえないにもかかわらず、研究者によって、記述がかなり異なっていることがある。これがインフォーマントの違いによるのか方言の違いなのか、当面判断できない場合が多い。また同書はアクセントや母音調和についていわゆる俗説をそのままのみにしている面がある。さらに、筆者は十分承知しているはずであるのに、記述が舌足らずのものがある。本稿では敢えて挙げ足取りをして、コメントを付け加えることにする。

1. プリヤート語

「言語的には $s > h$ 変化があるが、/ö/はない。č [tʃ] (tš) は š・s に、j [dʒ] (dš) は ž・z に変化している」(p. 29)

これはプリヤートの標準語であるホリ方言についてのみ言えることである。

Мөөмөө, С. Ю. Мөнх-амгалан (1984: 173-195) によるとプリヤートの諸方言には次のような違いがある。ホーチン・バルガは武達 (1983) による。

	アラル	ホハン	エリトアラガト	トクシン	サトール	ウソゴル	バルゴージン	ホリ	ホーチンバルガ
θの有無		е	е	е	е	е	е稀	—	—
j	ж	й	й			дж	й, ж	ж	ɟ
						дз	з	з	dz
č		с		ш	ч	ч	ш	ш	ʃ, ʧ
						ц	с	с	s, ts
s			h	h		с	h	с, h	x, s, φ

2. モゴール語

「言語特徴としては、本来的な長母音を保存し、動詞に人称活用がある」(p. 30)

Weiers (1970) によると母音の長短の区別は量ではなく質である。本来的な長母音がどれであるのかは、実際には決定困難である。

3. ダグール語

「古い*p-音、人称語尾、本来的な長母音を保存している」(p. 30)

ダグール語のハイラル方言は古い*p-音を保存していない。開英編 (1982) によると新疆方言は長母音をほとんど保存していない。本来的な長母音がどれであるのかは決定困難である。土族語互助方言とダグール語プトハ方言とに共通のそれらしき母音を持っている語は「五」と「木」のみである。

4. 東郷

「自称はサンタ (Santa)」(p. 32)

布和等編 (1988) 『東郷語詞彙』によれば、santa ①回族 ②伊斯蘭教徒、一方、duŋɕian 東郷 (民族名称兼地名) とある。したがって自称がサンタというわけではない。

5. 康家語

「系統的に保安語よりも東郷語である使用人口が数百人程度の康家語があると報告されている」(p. 33)

斯欽朝克圖 (1999: 4) によると、実際に康家語が話せる人は487人である。康家語が東郷語に最も近い関係にあると発言したのは斯欽朝克圖著 (1999:15) によると李克郁であるが、実際は保安語よりも東郷語に近いとはいえない。むしろ逆である。Büke (2001: 12) も音韻面でやはり保安語に最も近いと結論づけている。

斯欽朝克圖 (1999: 269-277) に康家語と保安語、東郷語、土族語、東部裕固語との共通点が述べられている。

康家語と保安語との共通点

- (一) 十、二十、…九十の構成法が類似している。
- (二) 方向格附加成分が存在しない。
- (三) 造格と共同格が同じ形態である。
- (四) 第一人称と第二人称の造格と共同格の形態が一致する。
- (五) 「これほど」「それほど」という語の語末に「一」を表す形態素が付く。
- (六) 再帰格が存在しない
- (七) 第一人称、第二人称の所属附加成分が存在しない。
- (八) 比較の「より」に相当する部分に「見る」という動詞を用いる。
- (九) 方位詞複合附加成分が同じである。
- (十) 「一」を表す形態素を後置し単数を表す。
- (十一) 数詞+名詞、名詞+数詞の2通りの語順が可能である。
- (十二) 「椀」という固有語を「万」の意味で用いる。

康家語 *ajika*、保安語干河灘方言 *ajcə*

康家語と東郷語の共通点

- (一) 音節末の *l* が *n* になる。※
- (二) *ti*, *di* が破擦音化する。※
- (三) 形容詞強調形の重複部分の *b* が脱落する。
- (四) 副詞型方位詞附加成分 *-run/-gun* がある。
- (五) *matu* 「どのような」という語がある。
- (六) 第一人称と第二人称の属格と対格が同じである。
- (七) 擬声語 *suru* が同じである。
- (八) 古風な「山羊毛」という語がある。康家語 *Galbasun*、東郷語 *Garasun*

康家語と土族語との共通点

- (一) *b > r > ʃ* の変化に類似点がある。※
- (二) 語気詞と状態詞に同じものがある。

康家語と東部裕固語との共通点

- (一) *p* を保存している。※

(二) 陳述形将来時-gi/-gʉn (i) /gʉn (a) が共通である。

(※は一部にのみいえる特徴である)

斯欽朝克圖 (1999:269-277) には明記されていないが、次に述べる項目にも注意を払う必要がある。斯欽朝克圖 (1999:259) は8が康家語に固有の特徴であると述べているが、そうではない。

1. 長母音がない：保安語積石山方言、東郷語、土族語民和方言と共通
2. 母音調和がない：保安語と共通
3. 人称代名詞において属格＝対格：東郷語と共通
4. 主観範疇／客観範疇がある：保安語、土族語、東部裕固語と共通
5. -lca に対応する形式がなく、-ldu に対応する形式だけを用いる：東郷語、土族語、と共通
6. bitegei に対応する形式がなく、buu に対応する形式だけを用いる：東郷語、土族語と共通
7. ほとんどの語で語末の n が ŋ に変化している：保安語と共通
8. ma 「と」という語がある：東郷語、土族語民和方言と共通
9. -fdza の f のような添加子音がある：保安語年都乎方言、土族語天祝方言と共通
10. bida に対応する形式が排除式、ba に対応する形式が包括式になる：保安語、東郷語と共通

6. 雲南の蒙古

「雲南にも「蒙古」と自称する人々と契丹文字の墓標を持つ人々がいる。(中略) 言語的・民族的には内蒙古に似ている」(p. 33)

雲南のモンゴル族の言語が内蒙古に似ているとは決して言えない。最も近いのはイ語である。Schwarz (1984)、和即仁 (1989) を参照のこと。

7. アクセント

「モンゴル語でも第一音節に強さが固定している」(p. 50)

「黄ウイグル語 (東部裕固語) …。強さは東郷語、保安語、土族語と同じく、最終音節にある」(pp. 69-70)

Svantesson (1990, ?) や呼和他 (2001) の実験音声学のデータによると、第一音節が常に最も強いとはいえない、アクセントをどう定義するかによるが、第一音節をそれ以外の音節と区別する特徴は、F₀ (基本周波数) が低いこと、長母音同士あるいは短母音同士なら第一音節のほうが長いこと、母音が弱化していないことの3つであり、強さや高さは無関係である。

ピッチの変動の様子が非常に重要である。第一音節が長母音で第二音節が短母音の場合、ピッチが最高になるのは第一音節の前半ではなく後半である。しかし第一音節が短母音で第二音節が長母音の場合は、ピッチが最高になるのは第二音節の前半である。どの音節にアク

セントがあるかというだけでは、実際の状況を正しく理解したことにはならない。

アクセントの記述が同一言語においても書物によって異なっている。東部裕固語に関して、照那斯圖編著 (1981: 14) は、アクセントは最終音節に来ると記述しているが、保朝魯 賈拉森編 (1990: 142-143) は母音を (1) のように分類し、(2) (3) (4) のように記述している。

- (1) 母音の分類 A: 長母音、B: ə以外の短母音、二重母音、C: ə
- (2) 母音の等級が同じなら最後の音節にアクセントが来る
- (3) 母音の等級が等しくないなら等級が上の母音の音節にアクセントが来る
- (4) əの音節にはアクセントは来ない

アクセントの記述の違い及びəの認定の違いによって、例えば以下のような違いが生じる。

(i) は『東部裕固語簡誌』の記述通り、(ii) は『東部裕固語簡誌』の記述に『東部裕固語詞彙』の記述を適用したもの、(iii) は『東部裕固語詞彙』の記述通りであり、下線がアクセントのある音節を表す。

照那斯圖編著 (1981)		保朝魯等編 (1984)	
『東部裕固語簡誌』		『東部裕固語詞彙』	
(i)	(ii)	(iii)	
at <u>f</u> a-	at <u>f</u> a-	at <u>f</u> ə-	(用畜口) 駄
arah <u>g</u> ə	arah <u>g</u> ə	arə <u>k</u> ə	酒
nuləs <u>ə</u> n	nuləs <u>ə</u> n	nulus <u>u</u> n	泪
nur <u>g</u> usən	nur <u>g</u> usən	unr <u>g</u> usun	脊髓
bə <u>g</u> ənə	bə <u>g</u> ənə	bə <u>g</u> ənə	①低 ②浅
bud <u>ə</u> -	bud <u>ə</u> -	bud <u>u</u> -	染
χulus <u>ə</u> n	χulus <u>ə</u> n	xulus <u>u</u> n	竹
χaw <u>ə</u> r	χaw <u>ə</u> r	x ^h ar	鼻
hoh <u>ə</u> r	hoh <u>ə</u> r	hohor	気味
qas <u>ə</u> -	qas <u>ə</u> -	qəs <u>ə</u> -	刮
ɕad <u>ə</u> m	ɕad <u>ə</u> m	ɕadam	婆家
qud <u>z</u> in	qud <u>z</u> in	cut <u>f</u> ən	三十
solw <u>ə</u> m	solw <u>ə</u> m	sol <u>β</u> ə	半歩
sud <u>z</u> əg	sud <u>z</u> əg	sud <u>z</u> əg	迷信
tamah <u>g</u> ə	tamah <u>g</u> ə	taməkə	煙 (香煙 煙草等)
tar <u>r</u> ən	tar <u>r</u> ən	tar <u>ɕ</u> ən	肥

また土族語は、照那斯圖編著 (1981: 10-11) によると、アクセントは最終音節にあるとされているが、実際の音声を開くと必ずしもそうっていない。席元麟が読んだテープの一部を分析すると次のようになる。韻律外要素が付くとピッチはその要素の前が高い (⌈がついたものはその前が高い)。韻律内要素が付いた場合は最後の音節のピッチが高い。ある要素が両方の特徴を持っていることもある。(＊の形態素)。⌈はピッチの下がり目を表す。

韻律外要素

数	-ge (単数), -sge (複数), -mange 「等」
範疇	-wa (客観範疇)
格	-nu (対格) *, -du (与位格) *, -re (位格), -ji (方向)
助詞、後置詞	da 「も」, turo 「中」, dire 「上」, hoino 「後」, tigii 「ように」
副動詞	hughuwaa ¹ nu 「分けて」, -sa ¹ da (譲歩), -san ¹ gulo (副動詞), yama ¹ giji 「どうやって」, yama ¹ gisa ¹ da 「どうしても」
終止形	-na (現在) *
否定	-gui, -gua
複合語 (日)	niguu ¹ durgedu 「ある日」, hoiji ¹ dur 「次の日」, kiduu ¹ dur 「数日」
その他	gina 「そうだ」, laman ¹ qan 「きれいな」, Dalan ¹ soo 「ダランソー」 (人 名)

韻律内要素

数	-ge (単数) *
格	-nu (対格) *, -du (与位格) *, -laa
副動詞	-ji (結合), -aanu (分離), -sa (仮定), -la (目的)
終止形	-na (現在) *, -m (現在), -ja (過去)
志向形	-ya 「しよう」
形動詞	-gui (未来), -gu (未来), -san (過去)

保安語に関して、陳乃雄編著 (1986: 71-72) は、無標のアクセントは最終音節にあるが、合成語では2つの結合部分にアクセントがあり、附加成分があるとその部分 (-ge, -baは除く) にアクセントが来るし、語彙的に最終音節以外の音節にあるものがある。また、-ge, -baが付いた語はその前の音節にアクセントがあると、記述されている。

保安語の干河灘方言について、陳乃雄 (1995: 131-132) は、無標のアクセントは最終音節にあるが、一部の感嘆詞は最後の音節以外にアクセントがあり、合成語は2つの語の結合部の前あるいは前の語の最終音節が来るとして、'nuudə (< nə, udər, 今天>, dA'loŋrəŋ (< dAloŋ harəŋ, 七十) の例をあげ、漢語からの借用語は一声が軽、二、三、四声が重の傾向がある、と述べている。

保安語の大墩方言について、布和、劉照雄編著 (1982: 15-16) は、無標のアクセントは最終音節にあるが、合成語では、1. 各語がアクセントを持っている、2. 結合が緊密な場合はアクセントは一つだけとして、har'wudə (< harwaŋ udər) “十天”、'nidə (< ənə udər) “今天” の例をあげ、第一音節にアクセントがある語があるとして、'gugu “布谷鳥”、'yrəu “肌肉” の例をあげている。

東郷語に関しては、各資料におけるアクセントの記述にかなり相違点がある。最小対立を含む例だけでも以下のような違いがある。

	劉照雄 (1965 : 165)	劉照雄 (1981 : 17)	布和 (1985 : 81) (1988) 008	那森柏 (1988)	漢語
A	ba'wa 'bawa	ba'wa 'bawa	ba' wa 'bawa	—	聖職者 曾祖父
B	dawa'la 'dawala	—	≠ ['dawala 008 'dawala 008	—	水泡 膀胱
C	—	ʂən'dzuu 'ʂəndzuu	—	—	衫子 shan'zi 上着 扇子 shan'zi うちわ
D	—	ba'o'dzuu 'baodzuu	—	—	包子 bao'zi 饅頭 豹子 bao'zi ヒョウ
E	—	biən'dz i - 'biəndzi-	≠ [biandzi 008 biandzi 008	—	編 bian' 編む 変 bian' 変わる
F	—	—	ʂi'dzi 'ʂidzi	—	獅子 shi'zi 獅子 柿子 shi'zi 柿
G	—	—	i'dzi 'idzi	—	椅子 yi'zi 椅子 胰子 yi'zi 洗濯石鹼
H	—	—	ba'dzi 'badzi	ba'dzuu 'badzuu	疤子 ba'zi 傷 把子 ba'zi 握る所
I	—	—	putura- —	≠ pu'tura 'putura	散る 粉
J	—	—	bosi- 'bosi	bo'suu 'bosuu	起きる 布

劉照雄 (1981) の語彙リストに基づいた語彙の読み上げテープで観察される有標アクセントには次のような語がある。布和の記述との違いを示すために並記する。布和に記述されている有標アクセントは「虎」だけである。数字は通し番号を表す。前半はHL (高低)、後半はそれ以外のピッチで発音されていることを表す。(H : 高、L : 低、R : 上昇 (LH)、F : 下降 (HL))

	劉照雄 (1981 : 109~)	布和 (1988) 008	テープ (1986)	漢語
8	gaidzuu	gaidzi	'gedzɿ	HL 蓋子 gai'zi 蓋
10	gəwa	—	'ge wə	HL 平安な
35	tʂui	—	'tʂ+ɿtʂ+ɿ	HL 錘子 chui'zi ハンマー
64	ingjə-	ingjə-	'ingjə-	HL こうする
65	boja	—	'boja	HL 白歯
68	fanfa	—	'banfa	HL 方法 fang'fa ³ 方法
74	adzəi	adzəi	'atɕe	HL 姐姐 jie'jie 姉

88	unmo	—	'unmo	HL		学問
119	linko	liŋko	'linkuo	HL	林檎 lin ² ke ¹	森
228	ʂumi	—	'ʂunmi	HL	蜜蜂 mi ¹ feng ¹	蜜蜂
232	basu	'basi	'basɿ	HL		虎
242	golo	—	'goluo	HL	角落 jiao ³ luo ⁴	隅
255	moʂu	—	'moʂɿ	HL	磨石 mo ¹ shi ²	白
278	qawa	qowa	'qawa	HL		鼻
315	gongon	—	'gongon	HL		ベル
328	gugu	gugu	'gugu	HL		ホトトギス
332	laji-	laji-	'laji-	HL	拉 la ¹	引く
351	mimao	—	'mimao	HL		乳をやる
358	(kəwon)	—	'pawə	HL		息子
478	kudan	—	'kudɔn	HL	胆 dan ³	胆汁
80	gandzu	—	'gandzan	HF	肝臓 gan ¹ zang ⁴	肝臓
285	(kəwosu)	—	'gəkan	HF		子供
116	miəndzəŋ	miəndzəŋ	'miəndzən	HF ~ HL		毛布
370	ɕiədzu	ɕiədzi	'ɕiədzi	FL ~ HL	靴子 xue ¹ zi	靴
78	nanfan	—	nanfan	RL	南方 nan ² fang	南
408	suigu	—	suigu	RL		軟骨
470	loto	loto	lotu	RL	駱駝 luo ⁴ tuo	ラクダ
401	mongu	—	mongu	RL ~ LF	蒙古 meng ³ gu ³	モンゴル
11	(dzuiwəi)	—	wuitu	RF	滋味 zi ¹ wei	味

確認できた複合語のアクセントは次のようである。

○#○○

33	kha zhanzi	H#LF		手+掌 (zhang ³)	手のひら
111	konzhanzi	H + LF [kuəndzəndzi]		足+掌 (zhang ³)	足の裏
217	khawa basun	H#LF [kəbasun]		鼻+糞	鼻水
451	lun sula	L#LF			虹
40	niekielien	H + LF [niekelen]			同じ
383	enbaine	L + HL [enbane]		これ+だ	～である

○○#○

193	udani hon	≠ LH#L [udaxon]			去年
143	niudu	≠ LH + L [enedu]		この+日	今日

○○#○○

20	erma mori	LH#LF		種馬 (zhong ³ ma ³) + 馬	種馬
61	moron bienzi	LH#LF [muor / zɔn...]		河+	岸
117	unughun	≠ LH#LF [zima muɕun]		山羊+	山羊の仔

559 aman 'gozi	LM#HL	口+	口元
7 shanma mori	HH#LF	驕馬 (shan'ma') + 馬	去勢した雄馬
17 heiya ≠	HL#LF [nig e bari]	一+掴む	一握り
○○#○○○			
173 naizi arasun	LH#LLF	奶子 (nai'zi) + 皮	乳皮
○○○#○			
142 uruzhu hon	LLH#L [urudz u xon]		一昨年

○：音節 #：語境界 +：語境界（分ち書きなし）：有標

無標の場合のアクセントは次のようにまとめられる。

1. 後部要素が1音節なら、その音節はL
2. 後部要素が多音節なら、後部はL・・F
3. 前部要素が1音節なら、その音節はHまたはL
4. 前部要素が多音節なら、前部はL・・H

接尾辞が付いたときのアクセントに関して那森柏 (1988) は他の研究者が記述していない点にも触れている。要点をまとめると次のようになる。(ただし、韻律外要素、韻律内要素というのは那森柏が用いている用語ではない。、は第二アクセントを表す。)

韻律外要素 (アクセントは以下の接辞の直前の音節に来る)

名詞

格 -ni (属対格), -sə (奪格), -Gala (造格), -lə (共同格),
-rə (奪格?), -,sə, -,də

所属人称接辞 -mini, -dziaŋji, -maji, -tʂuni, -tani

集合数詞 -dzia

倍数詞 -fa

動詞

終止形 -nə (現在), -dzuiwo, -dzuo, -wo (過去)

意志・命令 -jə (意志), -giə 「させておけ」

副動詞 -dzui (結合), -də (分離), -sə (仮定), -tala (限界), -lə (目的)

韻律内要素 (アクセントは以下の接辞の最終音節に来る)

名詞

複数 -la, -tan, -ciə, -ciəliə

集合数詞 -la, -liə, -laŋ

動詞

形動詞 -ku (～-wu) (未来), -sən (過去)

他の記述と那森柏 (1988) の記述には次のような異同がある。

布和 (1985: 81)		那森柏 (1988)
mə'dziə-nə 「知る」	=	mə'dziə-nə
o'lu-nə 「得る」	=	o'lu-nə

布和 (1985 : 168)

bo'ro mo'ri mə'liə oro-'wo ≠ o'ro-wo
 灰色の馬が 前を 走った。

馬国良 (1988 : 7)

dziao-də-mi'ni 「私の弟に」 ≠ 'dziao-, də-mini

劉照雄 (1981 : 17)

ama-'ni 「母の／を」 ≠ a' ma-ni
 barindu-' dzu 「いっしょに持って」 ≠ barin' du-dzu

康家語については、斯欽朝克圖著 (1999: 41-42) にアクセントは最終音節にある、という記述が見られる。

康家語について詳しいことが分からないが、東部裕固語、土族語、保安語、東郷語のアクセントが最後の音節にあるというようなことは軽々しくは言えない。

8. カルムイク語

「カルムイク語では、とくに弱化がゼロとして示されている。moŋhl や tömr のように子音の連続と見えるので驚かされる。しかし、音韻論的に見るなら、妥当である。この弱化音は前の音節の母音と結びつく弱化音である。そのため、単独の音素とはみなしえない。ただ、単独の音素だとの意見もあり、議論が続けられている」(p. 51)

弱化母音を音素の概念で理解しようとするから決着が付かないのである。母音がどの位置にどの状況で挿入されるかは Street (1962) がカルムイク語のブザワ方言について formal, clear, muddy の3つのスタイルで子音連続がどういう条件で遮断されるかを初期の生成音韻論の枠組みで分析している。母音の現われる位置に関して Ramstedt (1976) の辞書のような表記ではまったく不十分であり、語末の短母音を考慮しない正書法は Street のいう pitch center を決める情報が欠けているため、基底形としても機能しない。したがって音素論的に見ても妥当ではない。

9. 突厥 at に対応するモンゴル語

「突厥 at 馬 トル at 参考モン ayta」(p. 55)

at に最も近い語をモンゴル語から探すのであれば、ayta ではなくて adayu であろう。

10. モンゴル文字

「問題は、モンゴル文字モンゴル語の特徴がいつ、どこのモンゴル語の話しことばを反映しているかである。ポイントは三点ある。

①母音間の /r/ ([ɣ] と [g]、また [b], [m] など) は、漢字の『元朝秘史』では、ドイツのモンゴル学者ヘーニッシュが'とするように、存在していない。

②『元朝秘史』にある /h/ は文語表記にはない。

③文語の edür 「日」の e-の音節が [e] でなく [ö] か [ü] であったなら、パスパ文字の

udur がこれを証明し、『元朝秘史』の edoe は文語的であることになる。

この三点がモンゴル文字 (文語表記) の来歴を知る手掛かりになる。」(pp. 62-63)

音節構造も重要な手掛かりである。モンゴル文語で音節末に来る子音 (すなわち rhyme の子音) は l, r, m, n, ng, b, d, g, γ, s であるが、チベット文語の語尾辞の位置 (すなわち C₁C₂C₃C₄V C₅C₆ の C₃ の位置) に来る子音 l, r, m, n, ng, b, d, g, s と非常によく一致する。これが何を意味するかは今まで誰も言及していないが、注目されるべき事柄である。

またモンゴル文語において r は語頭に来ないのみならず、直前に必ず母音が来るという制約がある。つまり、r が音節末に現われる場合は直前に母音があるが、r が音節初頭に現われる場合は直前の音節は開音節である。さらに言い換えると語中で子音が 2 つ続く場合、二番目の子音が r であることはない。

11. モンゴル文字

「文語の edür 「日」の e の音節が [e] でなく [ö] か [ü] であったなら、パスパ文字の udur がこれを証明し、『元朝秘史』の edoe は文語的であることになる」(p. 62③)

知らない人がこれを読むと『元朝秘史』の edoe が「日」という意味の語であると勘違いしてしまう恐れがある。『元朝秘史』の額雑額 (edö'e) は「今」であり、「日」は兀都児 (üdür) であって第一音節はやはり円唇母音であることを丁寧に述べるべきである。

12. モンゴル文字

「文字と話しことばとの関係では V C V (母音+子音+母音) の連続は V V となる」(p. 65)
V C V の C の位置に来る子音に制限があることを明記するべきである。

13. モンゴル文字

「第一音節が o と u か ö と ü の時、第二音節以下は u か ü とする」(p. 66)

Poppe (1951) はオルドス方言の母音の変化からモンゴル文語の母音を以下のように推定している。この説に従えば、第二音節の円唇母音は o, u, ö, ü の 4 通りあることになり、非常に古い時代に円唇牽引がすでに一部起こっていたことになる。

オルドス方言	モンゴル文語	
olon	olan	多い
toxo-	toqo-	鞍をつける
mu.du	modun	木
öngö	öngge	色
törö-	törö-	生まれる
wundur	öndür	高い

14. モンゴル語の母音調和

「服部は、カルムイク語は左下のように図示し、内モンゴルの正統派のチャハルの母音は、むしろツングース的に並べている。だが、モンゴル語の母音調和はツングース語の母音の構造枠からみて、IIの広狭型とIのuが中立になる型との中間型であるIIIである」(p. 69)

カル	i	y	u		チャ	i	u/o
	ε	œ	o				e/o
	a						ä/a

母音体系を二次元の平面上に投影すると、以上のような説明になってしまう。母音を分類するパラメーターは (i) 舌の前後、(ii) 舌の高さ (あるいは口腔の開き具合)、(iii) 唇の丸め具合以外に (iv) 咽頭の形状の違い (あるいは舌根の前後)、(v) 喉頭の形状も考慮に入れておかなければならない。(i) (ii) (iii) を三次元の図にしたのが p. 47にあるトルコ語の母音図である。レントゲン撮影による分析をしなければ実際のことは分からないが、IIの広狭型における違いは (ii) 舌の高さではなくて、(iv) や (v) が関係している。この特徴は covered, advanced tongue root, expanded, pharyngeal 等の名称で表現されてきたものであり、その実現されたものが tense/lax, 松/緊, kōndei/čangya, ere/eme, мягкий/твердый 等の名称で表現されてきたものである。Svantesson (1985) はモンゴル系の言語における母音調和の推移 (shift)、ウムラウト、円唇牽引に関して音響的なデータを示しながら、総合的に論じている。(iv) (v) に関しては、Jacobson (1980) を参照のこと。

15. 東部裕固語の母音調和の交替形の数

「黄ウイグル語 (東部裕固語) では母音調和は崩れているが、造格には + ār ~ + ēr ~ + ōr 交替がある」(p. 69)

照那斯圖 (1981: 18) では、確かに奪格 (-sa/-se/-so)、造格 (-aar/-eer/-oor 及び -kaar/-geer/-koor)、共同格 (-la/-le/-lo) の母音調和による交替形は 3 つであるが、Тенишев, Тодаева (1966: 55) では、与位格 (-ла, -де; -та, -те)、奪格 (-са, -се)、造格 (-ар, -ер)、共同格 (-ла, -ле) は母音調和の交替形が 2 つしかない。一方、保朝魯、賈拉森編著 (1990: 180) によると、母音調和の交替形がない与位格 (-ta/-da)、2 つある共同格 (-la/-le)、4 つある奪格 (-sa/-se/-so/-sø)、造格 (-a:r/-e:r/-o:r/ø:r) とがある。方言のせいかなインフォーマントのせいかな分からないが、交替形の数が微妙に違う。

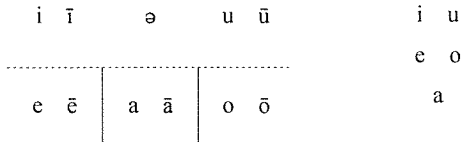
16. 土族語の母音調和の交替形の数

「土族語では母音調和はないが、名詞派生の動詞語幹形成辞 (+ la ~ ~ - le ~ ~ + lo ~) に交替がある」(p. 70)

下位方言で交替形の数が違うが、分離副動詞にも母音調和の交替形がある。正書法で表すと、東溝方言では -aa(nu), -ee(nu), -oo(nu), -waa(nu) の形式があり、語幹末短母音が接辞の交替形を決める。ハルチゴル方言でも同様であるが、どの形式が付くかは語彙によって異なる。-waa(nu) は長母音語幹につく形式であるが、-wee(nu), -woo(nu) という形式は

ないので、母音調和の交替形はない。天祝方言では-aa(nu), -waa(nu) しかないので母音調和による交替形はない。ナリングル方言では-aa(nu) しかない。

17. 土族語の母音の数



(p. 70)

(p. 76)

p. 70の図は照那斯圖 (1981: 3) の図からəを除き、舌の高さを5段階から2段階に簡略化したものであるが、p. 76の図で母音が一つ減っていることに関する説明がない。

照那斯圖 (1981) の記述に基づくと、/i/, /ə/, /u/とその異音の現われる環境(直前の音)は以下になるので、漢語か固有語かの区別を無視すれば、/i/と/ə/を別の音素と認定する必要はなくなる。

	歯音	反り舌音	歯茎硬口蓋音	硬口蓋音	唇音	語頭	その他
音素	異音						
/i/	[i]	漢語					
	[ɨ]	○					
	[i]		語中	語中	漢語	○	
/e/	[ə~i]	固有語					
	[ɣ]		語末	語末			○
/u/	[y]		○	○			
	[ɣ]				語中		
	[u]				語末		

しかし p. 70のほうにも問題がある。方言間で次のような違いがある。東溝方言の形式に対応する形式を各方言で示すと次のようになる。ただし aa, ii は除く。

	東溝方言	ハルチゴル方言	ナリングル方言	天祝方言
	Тодасва			
a 類	uu	ȳ, ō, y	ū	əuu
b 類	au	ȳ, ō	ū.	əuu, o
c 類	oo	ō	ō, uo	o, ω, ωω
d 類	ee	ē, ie, iē	ē, ie, iē	ii, iε, ε, ei, εε
e 類	ai	ē, ī	ē.	ii, ε, ei

18. čilayu

「čの一部は* tである」(p. 72)

čの前半は閉鎖性がありtの調音と共通点があるということを言わなければ何のことか分からない。

19. アルホルチン方言

「jの子音は* d + iである。アルホルチンではjがtとなる。emtas : モン anjisu「鋤」(p. 72)

jがtとなる条件は語彙的にしか説明できない。しかも、なぜアルホルチンを取り上げるのか理解できない。脱口蓋化を起こしている方言は他にもたくさんあるし、d とčが自由交替をなす方言もある。脱口蓋化を起こすか起こさないかは方言によって違いがあるが、地域的な特徴ではない。孫竹(1990:113)によると「鋤」を表す語は各方言で次のようになっている。

脱口蓋化を起こしている方言

正藍旗 endas、巴林右旗 endas、東蘇尼德 andis、阿拉善 andas、都藍 andas、
和静 andasun

脱口蓋化を起こしている形式と起こしていない形式とがある方言

達爾罕 endas ~ endzis

脱口蓋化を起こしていない方言 (あるいは言語)

陳巴爾虎 andzu、布利亞德 andzhan、喀喇沁 endzis、鄂托克 andzus、土族語 ndzasə。
東郷語 andzasun

Тодаева (1981 : 113) によると次のようである。

脱口蓋化を起こしている方言

хорч., горл., бар., онн., найм., хеш. endас ; джал., дурб., endат.

脱口蓋化を起こしていない方言

архорч., харч., тум. endжас ; шгол., уцаб., чох. andжас ; орд. andжасу
монг. anjisun, anjasun

20. ハルハ方言の子音連続

「モンゴル語のハルハ語では、ewderex「壊れる」と言うのがある」(p. 72)

この語を例として取り上げる意味が分からない。ハルハ方言では語中子音連続はC⁷C⁹C、語末子音連続はC⁷C⁹である。(なおC⁷:м, н, г, л, б, в, р、C⁹:ц, ж, з, с, д, т, щ, ч, х、C : 子音一般)

21. 土族語の与位格

「与位格の+ dA は土族語では furun + Dā「下に (モン uruyu + da)」のように長い」(pp. 73-74)

与位格は短母音である。

22. 母音調和の交替形の数

「モンゴル語の話しことばでは、母音調和の交替形が4つである場合があり、例外的に母音調和の交替が3つしかない場合がある。これはツングースで一般的である。モンゴルでも、ブリアート、ドルベト、ダゲール、北京北方のチャハル正藍旗、さらに、中国内陸のモンゴル語にも見られることは既に指摘した通りである。これらの現象は、満州族と接触したモンゴル地域か、元々から古い特徴を持っている地域かに共通している」(p. 77)

ブリアート語 (のホリ方言) の母音調和の交替形が3つであるというのは短母音を含む場合であって、長母音を含む場合は4つある。

母音調和の交替形の数は言語接触とは無関係である。ホルチン方言の長母音を含む交替形は3つであるが、ハルハ方言ではある条件で2つになる。次の例は交替形の例ではないが、Čoyi Jungjab (1982:83) によると、ホルチン方言では *u* の後に3通りの長母音 (*ɑ*, *ə*, *o*) が現われるが、ハルハ方言では *yy*, *yy* の後に2通りの長母音 (*aa*, *əə*) しか現われない。

ホルチン方言 ハルハ方言

adu:ga:n	адугаа	自分の馬群を
ə:du:lə:d	эдүүлээд	乳をすっぱくさせて
o:fu:lso:r	очуулсаар	行かせれば
nuru:nda:n	нуруундаа	自分の背中に
ə:ludars	айллуудаас	たくさんの村から
œ:rtulə:d	ойртуулаад	近づけて

この違いは、ホルチン方言の *u* は中性母音であり、次の音節の母音調和に関与していないのに対し、ハルハ方言の *yy*, *yy* は中性母音ではなく、次の音節の母音調和の trigger になっているためである。

ハルハ方言でも *øy* という二重母音がないために3通りの交替形しか持っていない接辞がある。

(1) -тай~-той~-тэй, (2) -мтгай, -мтгой, -мтгий: -мхай, -мхой, -мхнй, (1) は *ай*~*ой*~*эй* の交替、(2) は *ай*~*ой*~*ий* の交替である。どちらになるかは先行子音によって決まっているとしか言えない。また、高母音 *y*, *γ* を含む接辞の交替形は2つしかない。ブリアート語 (のホリ方言) には短母音の *ə* がないから、短母音を含む交替形が3つしかないのであって、長母音 *œə* は存在するから、長母音を含む交替形は4つある。

「元々から古い特徴を持っている地域」というのは青海省・甘粛省の言語のことであろうが、母音調和の交替形の数と古い特徴とは別である。

土族語の分離副動詞 (順序体副動詞) は交替形の母音の数から言うと、東溝方言と哈拉直溝方言は3通り、天祝方言は1通りである。方言間で微妙な差がある。

東郷語の派生接辞は交替形を持つものと持たないものがある。布和編著 (1985:251-262) によると交替形を持つものは、3種類の交替形を持つもの (-Ca/-C(i)ə/-Co) と、2種類の交替形を持つもの (-Ca/-C(i)ə) とに大別できる。3種類の交替形を持つものは動詞派生辞であるという共通点がある。4種類の交替形を持つものがないのは母音の数がモンゴル語に比べて少ないからであり、古い特徴を残しているわけではない。

23. o ~ wa 交替

「遼金代でのモンゴル語に o ~ wa の交替を仮定したい。類似の音声現象に、モンゴル文語の očir ~ wačir 「金剛」、on 「年」（秘史 hon、ダグール huan ~ oon がある）」(p. 80)

ダグール語の huan の形式は Ivanovskiy (1828 : 54) にしか記録されていない。この形式がそれほど意味を持っているのであろうか。

Ivanovskiy (1828 : 54) <i>Manjurica</i>	хон, хуán
Поппе (1930 : 88) Дагурское наречие	õн
Martin (1961) <i>Dagur Mongolian</i>	hoon
開英編 (1982) 『達斡爾、哈薩克、漢語対照詞典』	Hon
拿木四来、哈斯額爾敦 (1983 : 560) 『達斡爾語与蒙古語比較』	хo:n
恩和巴圖等編 (1984) 『達斡爾語詞彙』	хo:n
Тодаева (1986 : 177) Дагурский язык	хõн
恩和巴圖編 (1987) 『達斡爾語小詞典』	hoon

哈勘楚倫、胡格金台 (? : 183) 『達呼爾方言與滿、蒙語之異同比較』 HON

ダグール語の「年」のような現象は東郷語や土族語にも見られるものであって、必ずしも古い時代の交替形であるとは限らない。

東郷語では η の前の o は uo と自由交替をなす。

Тодаева (1961)	劉照雄編著 (1981) 『東郷語簡誌』	孫竹主編 (1985) 『蒙古語族語言詞典』	布和等編 (1988) 『東郷語詞彙』
----------------	----------------------	------------------------	---------------------

第一音節

ку <u>ан</u>	kon	kon	ku <u>an</u>	足
у <u>ан</u> шы-	oŋ <u>ш</u> -	u <u>an</u> ш-	oŋ <u>ši</u> -, <u>wan</u> ši-	読む
хон	хон	хон	хoŋ, х <u>uan</u>	年

第二音節

haru <u>ан</u>	haron	haron	haroŋ, haru <u>an</u>	十
джу <u>бу</u> ан	dz <u>ш</u> oŋ	—	dz <u>i</u> oŋ	六
чу <u>бу</u> эн	t <u>ш</u> oŋ	t <u>ш</u> o <u>uan</u>	t <u>ш</u> o <u>o</u> ŋ	少ない

土族語でも、哈斯巴特爾等編 (1985:10-11, 17-18) によると、少数の状況で典型的な [o] になる以外は [ʷ], [ʷ], [ʷa], [ʷo] であり、u は [ua] という色彩を帯びることもある、と述べられている。「年」を表す語には次のように Heissig (1980) の資料に上昇二重母音が現われる。

de Smedt et Mostaert (1933) <i>Dictionnaire Monguor-Français</i>	fän
Schröder (1959) <i>Aus der Volksdichtung der Monguor</i>	fän
Heissing (1980) <i>Geser rëdzia-wu</i>	ffuän GR546
Heissing (1980) <i>Geser rëdzia-wu</i>	fän GR549
Тодаева (1973) Монгорский язык	фен
李克郁 (1985) 『土族語詞典』	fon, fan

甘肅省《格薩爾》工作領導小組辦公室編 (1996) 『格薩爾文庫』 fan 2194
 Schröder (1959) の資料の範囲だけでも次のような uo ~ o の自由交替がある。

第一音節

luoš- (B 29)	loš- (XM 99)	飢える
nuor (XM104)	nor (XM259)	眠り
puosg.uo- (Xoni 220)	posg.uo- (Br 2)	建てる
šduod (Xoni 38)	šdodě (A 63)	上
xuodzën (XM 299)	xodzën (XM 296)	乾いた

第二音節

doruo (MI 108)	doro (SN 23)	下
xōluo- (Xoni 162)	xōlo- (XM 296)	結ぶ

なおダグール語の第二音節の a による第一音節の折れについては例外の処理も含めて、栗林 (1993) に詳しい考察がある。

24. 属格と対格

「属格と対格とが、ともに機能的にゼロで、形も同一の例がある。中国のモンゴル系の言語では、ダグール語で + yi ~ + i。土族・東郷・保安の各言語で + n V、黄ウイグル語 (東部裕固語) では + ə とか + in、+ i となっている」 (p. 96④)

この表現は名詞については正しいが、東部裕固語、土族語、保安語、ダグール語の 1、2 人称代名詞については必ずしも正しくない。以下の表で属格と対格が同じ形式になっているのは点線で囲んだ部分のみである。データはすべて『簡誌』から引用する。

		東部裕固語	土族語	保安語	ダグール語
1 人称単数	属格	mən-ə	mun-ə	mənə	min-ii
	対格	nam-in	ndaa	nadə	nam-ii
1 人称複数 (排除形)	属格	budan-ə	ndaan-ə	bədanə	maan-ii
	対格	budan-ə	budangula-nə budasge-nə budangula-nə budasge-nə	bədandə	maan-ii
1 人称単数 (包括形)	属格	budas-ə		manə	bedn-ii
	対格	budas-ə		mandə	bedn-ii
2 人称単数	属格	tʃən-ə	tʃən-ə	tʃinə	ʃin-ii
	対格	tʃən-in	tʃəmu (tʃəonii)	tʃiodə	ʃam-ii

2 人称複数	属格	tan-ə	tan-ə	tanə	taan-ii
	対格	tan-ə	tanɣula-nə tansge-nə tanɣula-nə tansge-nə	tandə	taan-ii

東郷語と康家語は1、2人称についても属格と対格が同じ形式をしている。土族語の1人称単数形の対格は与位格と同じ形式をしている。また保安語の1、2人称の対格は与位格と同じ形式をしているが、実際はこれよりも複雑である。詳細は陳乃雄編（1986:390-393）を参照のこと。

25. 数詞の基本形と修飾形

「この種の基本形と修飾形との区別はモンゴル語では組織的である」(p. 105)

組織的であると決していえない。ハルハ方言にはない次のような現象が方言によっては見られる。

道布編著（1983:38-39）によると錫林郭勒盟正藍旗の口語では19、29、99等の一の位が9の場合、十の位の数字にはnが付かない。また102、150等の百の位の数字にもnが付かない。一の位の9の前の数字のnが脱落する現象は東部裕固語、土族語、保安語にも見られる。

東部裕固語

19	harβa ɕisən	保朝魯、賈拉森編（1990：196）
99	jere ɕisən	保朝魯、賈拉森編（1990：196）
999	ɕisən dʒun jere ɕisən	保朝魯、賈拉森編（1990：198）
9999	ɕisən məŋɕan ɕisən dʒun jereɲ ɕisən (sic)	保朝魯、賈拉森編（1990：199）

土族語

999	ʂdzen dʒoŋ yäriɲ ʂdzen (sic)	Heissig (1980) (GR 667)
999	ʂdzen dʒoŋ yäri ʂdzən	Heissig (1980) (GR 706)

保安語

19	hara jirsəŋ	Čen nai siyang (1981：88) 年都乎方言
29	χərə jirsəŋ	Čen nai siyang (1981：88) 年都乎方言
19	har-iasuŋ	布和、劉照雄編著（1982：35）大墩方言
29	χor-iasuŋ	布和、劉照雄編著（1982：35）大墩方言
99	iasaraŋ-iasuŋ (sic)	布和、劉照雄編著（1982：35）大墩方言

この現象はダグール語にはない。科爾沁方言にもないようである。（査干哈達（1995:66））。またカルムイク語にもない。

しかしダグール語の数詞にはnを持つことがあるものと、nを持つことがないものがある。仲素純編著（1982：47）によると、ダグール語では数詞は次のように、他の諸方言にも

見られる「一」「二」の特殊性と共に、長母音や二重母音で終わる数詞にも n を持った形式がない。

nək 「一」、xojir 「二」、gwarəb, gwarbən 「三」、durub, durbun 「四」、taaw, taawən 「五」、dʒirgoo 「六」、doloo 「七」、naim, naimən 「八」、jis, isən 「九」、xarəb, xarbən 「十」、xorj, xorin 「二十」、gotʃ, gotʃin 「三十」、dutʃ, dutʃin 「四十」、tabj, tabin 「五十」、dʒar, dʒarin 「六十」、dal, dalən 「七十」、naj, najin 「八十」、jir, irən 「九十」、dʒau 「百」、mjəŋg, mjəŋgən 「千」、tum, tumun 「万」

「一」と「二」は東部裕固語、土族語、保安語、東郷語でも n を持っていないが、「三」「四」「五」「六」「七」「八」「九」「十」「百」はこれらの言語では n (あるいは ŋ) が固定していて単独でも n を伴って用いられる。

26. 一人称複数包括形の祖形

「* bī + tā」(p. 113)

祖形に長母音がある理由が理解できないが、それは別にして、第二音節の音節初頭が t であると不都合なことがある。以下に示すように東部裕固語、土族語、保安語、東郷語、康家語は、b + 狭母音 + 舌先無声子音の語頭の b がすべて p になるという特徴がある。上述の祖形からはこれらの言語では語頭が p でなければならないが実際が b である。したがって祖形において第二音節初頭は無声子音ではありえない。この議論に関しては Hattori (1972)、清格爾泰 (1989)、フフパートル (1992)、佐藤 (1991 / 1992, 1995) を参照のこと。

	東部裕固語	土族語	保安語	東郷語	康家語	
bitegü				piçiu		棒
bitegüle-				piçiułiə-		棒
biçi-	pətfə-		pətçi-	pidzi-	pətfi-	写
bičig	pətfəg	puɖzig	pətçi		pətfiə	文字
butura-				putura-	puɖərə-	散開
					puɖərə-	
					puɖərə-	
bučal-				puɖzalu-		沸、煮開
burqan	pərqan	puɖgɑ:n				佛
burčay	pərtʃag	puɖzɑg	pətçag	puɖza	pəɖzəg	豆
bütüge-		puɖçi-		puɖu-		弥漫；結束
büküli		puɖgəli:				完整
bürkeger	pəkər					鍋蓋
bürkü-				puɖu-		棚、上房蓋
bütü				puɖu-		結束
bütün	pətən		puɖəŋ		pətən	整
					puɖə	

batu	bat	padə	batə	pudu		結実・堅固
bayta-	bagta-	paɣda-	wacta-	puda-	puda-	容納
					puta-	
bülteyi-	palti-			bəndzi-		登眼
bayča	bagtʃa					(磚茶) 塊
belčiger	beltʃe:r			bantʃə		草坡、牧場
belčir	beltʃir					匯合処
berke		purgə				難的
boγča	boγtʃɔ					搭連
buqa				baɣatʃəu		公牛
buqul				buɣuŋ		麦朶
bulčarqai		padzærcai	bəntseigi			淋巴結；腺
böke	bəke					結実、牢固
budaya	bəda:n	buda:		budaŋ	budo	飯
budu-	budu-	budə-				染
büdügün	body:n	budən	bədəŋ	biəduŋ	bedəŋ	粗
bida	buda	buda	bədə	bidziæn	bəde	我們

なお保安語、東郷語、康家語では包括形と排除形が元朝秘史やダグール語とは逆になっていること、すなわち文語の bida に対応する形式は排除形であることも考慮に入れなければならない。東部裕固語でも buda は排除形であり、包括形は budas という形式になる。以上の言語以外のモンゴル語の方言（や言語）ではすべて第一音節初頭の子音は b、第二音節初頭の子音は d であるから、祖形で第二音節の初頭が t であるとは考えられない。

27. 「所有表示」(pp. 116-118)

所有の形式として (1) 対象+所有、(2) 代名詞+対象、(3) 代名詞+対象+所有の3通りの形式を考慮しておく必要がある。ハルハ方言を含む多くの方言には (1) と (2) があって (3) が無いが、ダグール語には (1) (2) (3) のすべてがある。ただし (2) の使用は限られている(名詞述語文にこの形式が表れ得る。Martin (1961) によると、オノン氏の方言では一人称単数は殆どこの形式である。)

ホーチン・バルグ・ブリヤート方言にも (1) (2) (3) のすべての形式があるが、(3) の形式が非常に多いことに注目すべきである。地域性を考慮するなら、この現象こそまさにダグール語との関係を検討すべきである。武達 (1983) からいくつか例を示す。

(1) mənə:dər bəj fin jamarʃu:β ? 215

今日 体は どうですか。

(2) ən mini: biʃig. 203

これは 私の 本です。

(3) ʃi: mini: ən ʃasagʁai ʃʁ da:gi:min undʒ ugnu: ? 29

おまえは 私の この 黄色の 仔馬に 乗ってくれ。

ʃini: əx ʃin bəl unɪŋkə:r ɔdɔ:uaila:d aβa: ju: ? 98

おまえの お母さんは 本当に 今 泣いている か。

ʃini: daisaŋ ʃin bəl ʃamaɪ xərɒn gədʒi:n, 116

あなたの 敵 が あなたに 危害を加えようとしています。

ʃini: ama: ʃin 297

おまえの 口から

tanaɪ xurfnu:d ʃin xədʒə: nu:dʒ irə: ? 211

あなたの 隣人は いつ 引っ越して 来ましたか。

東郷語にも (1) (2) (3) の3通りの形式がある。(3) の例を1例だけ示す。

bi tʃini miʃani-tʃini otoludʒi idʒiənə. 布和等編 (1986 : 191-192)

私は おまえの 肉を 切って 食べる。

28. 「補助動詞」 (pp. 131-132)

「与える」「来る」「行く」「見る」以外にも補助動詞がある。特に東部裕固語では ab-「取る」、orki-「捨てる」が文法化した-βa ; -ɔɔɔr, -ɔɔr, -ɔr が副動詞的な機能で頻繁に用いられる。また od-「行く」が文法化した-d がある。

29. 「動詞の人称表示」 (pp. 136-137)

元朝秘史、カルムイク語、ブリヤート語は人称代名詞が文末に来るため、もし疑問助詞があればそれよりも後に人称代名詞が来ることになる。一方ダグール語では人称代名詞は述語に後置するので、疑問助詞よりは前に置かれる。したがって動詞の人称表示といっても一括できない。ところでホーチンバルグ・ブリヤート語では、人称代名詞が疑問助詞より前に来る場合と後に来る場合とがある。この現象もダグール語との関係を検討してみる必要があるものである。武達 (1983) からいくつか例を示す。下線が人称代名詞である。

人称代名詞+疑問助詞

ʃi: xʊrmla: ʃu: ? 209

あなたは 結婚しています か。

ʃi: nad əndə:nə: ɔirxən xərʃə:gr:n xələ:d ugən ʃu: ? 212

あなたは 私に ここから 近い 店を 教えて くれますか。

ta: nad nəg xaβsra:d ugən ʃu: ! 228

あなたは 私を ちょっと 手伝って くれますか。

疑問助詞+人称代名詞

ʃini: du: ugɔ:ɔdər ju: xi:n u: ʃ ? 223

あなたの 弟は 朝 何を します か。
 xu:gdinɣ urmand ja:xaβ da: ʃi: ? 28
 子供の 意気込みで どうしますか。

30. 主観範疇／客観範疇

「土族語では一人称と二・三人称は対立し、現在で-ni 対-na、過去で-ji 対 ja となる。保安語も現在の一人称と二・三人称が対立し、一人称 ʃi 対 jo とである」(p. 138)

ni, ʃi の i は長母音でなければならない。Činggeltei (1987) は土族語の i : / a の違いが (1) 人称変化、(2) 確認／非確認、(3) 直接／間接；目撃した／目撃していない；考えにあった／考えになかった；概念上の行動／実際の行動、のいずれでもないことを示し、主観範疇／客観範疇という違いであることを提案した。

この見解は中国で出版されている東部裕固語、東郷語、保安語の書物にはすべて活かされている。しかし康家語ではなぜか人称による違いとして記述されている。(斯欽朝克圖著(1999))

31. 「共同と相互」(p. 158)

-lca に対応する形式をまったく使わないで、-ldu に対応する形式だけを使う言語（土族語、東郷語、康家語）がある。東部裕固語では両方の形式があるが、保朝魯、賈拉森編（1988, 1990）の範囲では、語彙的に相補分布しているようである。また共同形（互動態）と相互形（同動態）の表す内容はそれほど明確に区別できない。

-lda- (互動態)

共同の用法

1. odor βolɣon əŋgəldəgə: su:san bæ ɡəni: 56 「虎と牛と狐」
 毎日 こうして 暮らした そうだ。
2. tugula ɡadzar bærdzədə kəre: suraldɣar, 79 「蜂と燕」
 おまへたちは 各地へ 行って 尋ねろ。
3. …kə:s βe:de, mal nə hkəgɛ, lə aməraldaca: su:dʒ βai.
 人々は 病気になり、家畜 は 死に 休めなかった。
 114 「ルガスダン・パガンゴ」
4. …ɕur dzun əyeɣəŋ turəldaca:…283 「自伝」
 二 百人の 学生は 飢えて
5. mɔr de:rkə naɡəs da deɡereldəgə: e:resem bæ ɡəni: 『東部裕固語和蒙古語』231
 道の上の 木 も 倒れて きた そうだ。

相互の用法

6. tere tʃɔɡ nə ʃimar dʌgedə xun dzieleg (ə) ur, daɡqə lə aŋlaldadʒ βai.
 彼らは いつ 結婚する か まだ 相談していません。
 14 「日常会話」(五) 11

7. …gurrla aβaldəja, 27「日常会話」(十二) 6
二人で すもうをとりましょう。
8. tere gurrla xanəladəga: nag xadtə surdʒ əlgesen be gəni:
その 二匹は 友達になって 森の 中に 住んだ そうだ。
55「虎と牛と狐」
9. …nege tʃəca:n məgəi, nege xara məgəi aβaldəga: təgməgləgəgə:
一匹の 白い 蛇と 一匹の 黒い 蛇が すもうをとって からまって
sur:san bə gəni, 133「白い髭のお爺さん」
いた そうだ。
10. …bu munə xanəslə, larladədzə la su:βa, 30-31「日常会話」(十三) 12
私は 私の 友達と 話して いました。
11. bu ənxədə xaldala kərsendə dʒaŋ fudzi ergen gurrla larladəga:
私が エンへに 会いに 来たとき 張 書記は 彼ら 二人と 話して
su:ga: βai.
いました。
31「日常会話」(十三) 17
12. tere βidə nege xanələ:n larladədzla βai, 38「日常会話」(十五) 14
あちらで 一人の 友達と 話して います。
13. buda gurrla nege tʃəŋlədəja, 217「虎と牛と兎と猿」
我々 二人は 格闘しよう。
14. ənə la abtʃ iregədə nege sein gəsudə dain
これ(=ラサの大悲観世音)を 持って くる時 一つの 良い 戦争を
gərgəga: xarβəldəsudə daili nə cailagə gədz nege tʃan xarβəldəsa
起こし 射り合いながら 今まで 一度 射り合うと
təŋse la dʒa ene abtʃ ire fdaɡ(ə) βa:n
すると これを 持って 来ることが できる。
231「ラサの寺院はどのようにして作られたのか」
15. gurrlanə dʒaβsara:n xogəldəgə: ləgdərnasan bə gəni:
二人は 互いに 殴り合って 解決できなかった そうだ。
『東部裕固語和蒙古語』231
- 用法不明
16. malcaitʃə largəme lar dʒəŋ lar bəldʒ βa:n, tere nam:i:n ədɔ: aladʒ əgəŋja
狐が 言った 言葉は 本当の 言葉だ。 彼は私を 今 殺し しまおう
gədz gəŋgəwəldatʃurma dere kərsen bə gəni:, 62-63「虎と牛と狐」
と 混乱してしまった そうだ。
- 同一の行為者の行為が他の多くの人(物)に及ぶ用法
17. ke:nə maŋqan bədən amtətə βa:n, tʃə suralddʒ ab(ə) u: ? 80-81「蜂と燕」

どの 肉が 最も 美味いか おまえは 尋ねた か。

-ltʃa- (同動態)

共同の用法

1. guŋzəŋəs nəŋwa tʃactə u:ʃə ɕadəltʃala ɛredɛg nəŋwa βai.
労働者たちは ある とき 小麦を 刈りに 来ます。
26「日常会話」(十一) 9
2. tʃəmi:n dʒəβəʒja, nanda qagtʃa təkəltʃele ɛre, munə tɛrgen
あなたを 煩わせます。私を 押しに 来てください。私の車は
ʃbar htəɔ ərəɕə:dtʃ βai. 45「日常会話」(十九) 2
泥の 中に 入ってしまいました。
3. …tʃə namin tɛngertə ɕarɕəltʃala ɛre, 90「ラマと大工」
あなたは 私を 天へ 登らせに 来てください。
4. tʃə namda xanəɕara: nege ɕle barəltʃa ! 90「ラマと大工」
おまえは 私を 手伝って 一つ 仕事を しろ。
5. bu tʃəmadə maltəltʃaja. 162「白い髭のお爺さん」
私は おまえと 掘り合おう。

相互の用法

6. …kən kənɛ:n lə tanəltʃaɕa:, dʒala:ɕar tanəltʃaɕa:dʒ su:san bə ɕəni:
人 々と 知り合わず、帽子で 認知し合って いた そうだ。
227「裕固族歴史伝説」

以上を整理すると次のようになる。

-lda- (互動態) の付いた語

	意味	語幹	モンゴル文語の語幹			
aməralda-	共同	aməra-	V	amura-	V	休む
əŋgəlda-	共同	əŋgə-	V	ingge-	V	こうする
turəlda-	共同	tur-	C	tura-	V	飢える
degerəlda-	共同	degere-	V			倒れる
surald-	共同, ▲	sura-	V	sur-	C	尋ねる
aŋlaldə-	相互	aŋla-	V			相談する
aβaldə-	相互	aβ-	C	ab-	C	すもうをとる
xanalaldə-	相互	xanəla-	V	qani-	V	友達になる
xarβəlda-	相互	xarβə-	V	qarbu-	V	射る
xogəlda-	相互	xog-	C	kög-	C	殴る
larlaldə-	相互	larla	V			話す
tʃəŋləlda-	相互		V			格闘する
ɕəŋɕwaldə-	?		V			混乱してしまう

-ltʃa- (同動態) の付いた語

	意味	語幹	モンゴル文語の語幹			
barəltʃa-	共同	bar-	C	bari-	V	する
cadəltʃa-	共同	cadə-	V	γadu-	V	刈る
garəaltʃa-	共同		V	γarya-	V	登る
maltaltʃa-	共同	malta-	V	malta-	V	掘る
tʌlkəltʃe-	共同	tʌlkə-	V	tūili-	V	押す
tanəltʃa-	相互	tanə-	V	tani-	V	知る
toməltʃə-	?	tomə-	V	tomu-	V	燃る

▲ 同一の行為者の行為が他の多くの人(物)に及ぶ

1. -lda- (互動態) の用例数と-ltʃa- (同動態) の用例数の比はほぼ 2 対 1 である。
2. -ltʃa- (同動態) の機能には共同の用法のほうが圧倒的に多いが、-lda- (互動態) の機能には相互も共同もどちらの用法もある。
3. -lda- (互動態) と-ltʃa- (同動態) のどちらが付くかは動詞の語幹が東部裕固語において母音語幹か子音語幹かによっては区別できない。
4. -lda- (互動態) と-ltʃa- (同動態) のどちらが付くかは動詞の語幹がモンゴル文語において母音語幹か子音語幹かによっては区別できない。
5. -lda- (互動態) が付く動詞と-ltʃa- (同動態) が付く動詞の比は約 2 対 1 である。
6. -lda- (互動態) が付く動詞と-ltʃa- (同動態) が付く動詞は語彙的に相補分布を成している。

32. 膠着性としての接尾辞の組み合わせ

「bai-γul-γa- あら—せ—させる—、つくる、たてる」(p. 159)

「つくる、たてる」は正しくは「つくらせる、たてさせる」である。

ハルハ方言には項(argument)の数を増やさないで使役接辞を二重に付ける表現(-уулуул)がある(梅谷(1999)参照)。また土族語ではgharghaa-「出す」で済むところをgharghaalgha-と表現することがある。

33. 被使役者を表す格

「ハルハ語では与位格の変わりに(sic)造格でも使える。ゼロの部分に対格も使える」(p. 161)

この表現はあまりにも無責任である。被使役者を表す格は状況によって厳密に使い分けられている。1は与位格にすると手紙の受取人になるので、造格だけが可能、2は対格と造格は可、与位格は不可である。

1. Ах дүүгээрээ аавдаа захидал бичүүлсэн.
兄は 弟に 父宛てに 手紙を 書かせた。
2. хүүгээ/*хүүдээ/хүүгээрээ өөрөөгий нь цэвэрлүүлсэн.

息子に 部屋を 掃除させた。

34. 「モンゴル文語の bui (ハル we ~ be) は名詞的述語の疑問である」(p. 170)

これが何を意味するのが理解できない。

35. 条件と譲歩

「土族	条件	-sa ~-dza	譲歩	-sada
保安	条件	-sə~-sa	譲歩	-səda
東郷	条件	-sə	譲歩	-sənu ~ sənnu」

(p. 178)

土族語と保安語では譲歩の後半部分 (da, də) を省略できる (つまり条件の形式だけでも譲歩を表すことができる)。東郷語の譲歩の形式は確かに譲歩の用法も持っているが、分離副動詞と同じ用法のほうがはるかに多い。譲歩の固有の表現は土族語や保安語と同じ -sə da の形式、あるいは liaudzə である (布和 (1985 : 172))。

36. 「東郷語 (fuliəri ~ gigie)」(p. 200)

fuliəri は龍泉公社の方言 fugiəri の誤植であり、gigie は標準語の鎖南垣の方言 fugie の誤植である。

37. 「ぞ」の係結び

「天の三女子ぞ布勒瑚里湖にて水浴したり」(p. 94)

「ホエルン母ぞたちまちにして起きたり」(p. 134)

「テムジンぞ一頭の馬乗りたり」(pp. 134-135)

「ホエルン母ぞ一頭の馬乗りたり」(p. 135)

以上の例は係結びの規則を無視した日本語訳である。「ぞ」で訳す必要性がどれほどあるのか分からないが、敢えて「ぞ」を使うなら文末は終止形ではなくて連体形で結ぶべきである。

参考文献

- Büke (2001) 'Mongyor bülüg kelen ü abiyān u jarim ü jegdel ün qaričayulul' *Öbür mongyol un yeke suryayuli yin erdem sinjilgen ü sedgül 2001 on u I düger quyučaya*, 1-12
- Čen nai siyang (1981) 'Bao an kelen ü "toya",' *Öbür mongyol un yeke suryayuli yin mongyol kele bičig sudulqu yačar un kele bicig ün erdem sinjilgen ü ögülel ün tegübüri dörbedüger debter*, 87-102
- Činggeltei (1981) 'Mongyor kelen deki qoyar tusalaqu üyile üge yin tuqai,' *Öbür mongyol un yeke suryayuli yin mongyol kele bičig sudulqu yačar un kele bicig ün erdem sinjilgen ü ögülel ün tegübüri dörbedüger debter*, 35-42
- Čoyijungjab (1982) 'Qorčoin aman ayalyun u egēsig abiyalburi yin jarim ončaliy,' *Öbür mongyol un yeke suryayuli yin mongyol kele bičig sudulqu yačar un kele bicig ün erdem sinjilgen ü ögülel ün tegübüri tabduyār debter*, 71-86

- de Smedt, A et A. Mostaert (1933) Le dialecte Monguor parlé par les mongoles du Kansou occidental, III^e partie, *Dictionnaire Monguor-Français*, Imprimerie de l'université Catholique, Pei-p'ing
- Hattori, Shirô (1972) 'Initial Plosives of Proto-Mongolian and Their Later Developments,' *Science of Language* (『言語の科学』 No. 3, Tokyo Institute for Advanced Studies of Language (東京言語研究所), 63-92
- Heissig, Walther (1980) *Gerer rēdzia-wu*, Dominik Schröders nachgelassene Monguor (Tujen) -Version des Geser Epos aus Amdo, Otto Harrassowitz, Wiesbaden
- Ivanovskiy (1828) *Manjurica* I Specimens of the Solon and the Dagur Languages, Akadémiai kiadó, Budapest
- Jacobson, Leon C. (1980) 'Voice-quality Harmony in Western Nilotic Languages,' Vago, Robert M. ed. *Issues in Vowel Harmony*, Proceedings of the CUNY Linguistic Conference on Vowel Harmony, 14th May 1977, Amsterdam / John Benjamins B. V. 183-200
- Martin, Samuel E. (1961) *Dagur Mongolian Grammar, Texts and Lexicon*, Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series Vol. 4, Bloomington
- Poppe, Nicholas (1951) 'Remarks on the Vocalism of the Second Syllable in Mongolian,' *Harvard Journal of Asiatic Studies*, Vol. 14, 189-207
- Ramstedt, G.J. (1976) *Kalmückisches Wörterbuch*, Lexica societatis fenno-ugricae III, suomalais-ugrilainen seura, Helsinki
- Róna-tas (1960) 'Remarks on the Phonology of the Monguor Language,' *AOH XI/3*, 263-267
- Schwartz, Henry G. (1984) 'Some Notes on the Mongols of Yunnan,' *Central Asiatic Journal*, Vol. 28, No. 1-2, Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 100-118
- Schröder, Dominik (1959) *Aus der Volksdichtung der Monguor*, 1. Teil, Otto Harrassowitz, Wiesbaden
- Street, John, C. (1962) 'Kalmyk Shwa,' *American Studies in Altaic Linguistics*, Uralic and Altaic Series Vol. 13, 263-291
- Svantesson, Jan-Olof (1985) 'Vowel Harmony Shift in Mongolian,' *Lingua*, Vol. 64, No. 4, 283-327, North-Holland, Amsterdam
- Svantesson, Jan-Olof (1990) 'Phonetic Correlates of Stress in Mongolian,' *Proceedings of International Conference on Spoken Language Processing 90*, 617-620
- Svantesson, Jan-Olof (?) 'Stress in Khalkha Mongolian,' Олон улсын монголч эрдэмтний V их хурал 2,410-412
- Weiers, Michael (1970) 'Zu den Langen Vokalen in der Moghol Sprache,' *Zentralasiatische Studien des Seminars für Sprache- und Kulturwissenschaft Zentralasiens der Universität Bonn* 4, 467-473
- Мөөмөө, С. Ю. Мөнх-амгалан (1984) Орчин үеийн монгол хэл, аялгуу, Улаанбаатар
- Поппе (1930) Дагурское наречие, Материалы комиссии по исследованию монгольской и танну-тувинской народных республик и бурят-монгольской АССР, Вып. 6. М.
- Тенишев, Э.Р., Б. Х. Тодаева (1966) Язык желтых уйгуров, Издательство "наука" Главная редакция восточной литературы, Москва
- Тодаева, Б. Х. (1961) Дуншанский язык, Академия наук СССР, Институт народов азии, Издательство восточной литературы, Москва
- Тодаева, Б. Х. (1973) Монгорский язык, Издательство "наука" Главная редакция восточной литературы, Москва
- Тодаева, Б. Х. (1981) Язык монголов внутренней монголии Материалы и словарь, Издательство "наука" Главная редакция восточной литературы, Москва
- Тодаева, Б. Х. (1986) Дагурский язык, Издательство "наука" Главная редакция восточной литературы, Москва
- フフバートル (1992) 「モンゴル語族諸言語における語頭子音の軟音化」『一橋研究』第17巻 第3号 (通巻97号) 一橋大学大学院 一橋研究編集委員会 141-166
- 池田哲郎 (平成12) 『アルタイ語のはなし』 大学書林

- 栗林 均 (1993) 「音声変化の規則性とその例外 —ダグル語における円唇母音の「折れ」—」『研究紀要』第45号 日本大学人文科学研究所 37-63
- 佐藤暢治 (1991/1992) 「中国甘肅、青海省のモンゴル系諸言語における語頭閉鎖音の軟音化と硬音化について」『日本モンゴル学会紀要』Nos. 22/23, 14-28
- 佐藤暢治 (1995) 「東郷語における語頭両唇閉鎖音の発展年代について」『ニダバ』第24号 西日本言語学会 115-122
- 梅谷博之 (1999) 「現代モンゴル語の使役を表す接辞が連続して現われる場合」『日本言語学会 第118回大会予稿集』177-182
- 保朝魯等編 (1984) 『東部裕固語詞彙』蒙古語族語言方言研究叢書 017 内蒙古人民出版社
- 保朝魯 賈拉森編 (1988) 『東部裕固語話語材料』蒙古語族語言方言研究叢書 018 内蒙古人民出版社
- 保朝魯 賈拉森編 (1990) 『東部裕固語和蒙古語』蒙古語族語言方言研究叢書 016 内蒙古人民出版社
- 布和編著 (1985) 『東郷語和蒙古語』蒙古語族語言方言研究叢書 007 内蒙古人民出版社
- 布和等編 (1988) 『東郷語詞彙』蒙古語族語言方言研究叢書 008 内蒙古人民出版社
- 布和 劉照雄編著 (1982) 『保安語簡誌』中国少数民族語言簡誌叢書 民族出版社
- 陳乃雄等編 (1985) 『保安語詞彙』蒙古語族語言方言研究叢書 011 内蒙古人民出版社
- 陳乃雄編著 (1986) 『保安語和蒙古語』蒙古語族語言方言研究叢書 010 内蒙古人民出版社
- 陳乃雄 (1995) 『陳乃雄論文集』内蒙古教育出版社
- 道布編著 (1983) 『蒙古語簡誌』中国少数民族語言簡誌叢書 民族出版社
- 恩和巴圖等編 (1984) 『達斡爾語詞彙』蒙古語族語言方言研究叢書 005 内蒙古人民出版社
- 恩和巴圖編 (1987) 『達斡爾語小詞典』内蒙古人民出版社
- 甘肅省《格薩爾》工作領導小組辦公室、西北民族學院《格薩爾》研究所編 (1996) 『格薩爾文庫』 第三卷 甘肅民族出版社
- 哈斯巴特爾等編 (1985) 『土族語詞彙』蒙古語族語言方言研究叢書 014 内蒙古人民出版社
- 哈勘楚倫、胡格金台 (? : 183) 『達呼爾方言與滿、蒙語之異同比較』學海出版社
- 和即仁 (1989) 「雲南蒙古族語言及其係屬問題」『民族語文』1989年第5期25-36
- 呼和、陳嘉猷、鄭玉玲 (2001) 「蒙古語韻律特征声学参数数据」『內蒙古大學學報 (人文社会科学版)』第33卷第1期 39-43
- 開英編 (1982) 『達斡爾、哈薩克、漢語對照詞典』新疆人民出版社
- 李克郁編 (1985) 『土族語詞典』青海民族出版社
- 劉照雄編著 (1981) 『東郷語簡誌』中国少数民族語言簡誌叢書 民族出版社
- 拿木四來、哈斯額爾敦著 (1983 : 560) 『達斡爾語與蒙古語比較』内蒙古人民出版社
- 那森柏 (1988) 「東郷語詞重音」甘肅省民族事務委員會少數語辯、西北民族學院西北民族研究所編『東郷語論集』甘肅民族出版社 92-101
- 斯欽朝克圖著 (1999) 『康家語』上海遠東出版社
- 查干哈達 (1995) 『蒙古語科爾沁土語研究』社会科学文献出版社
- 清格爾泰 (1989) 「蒙古語族語中的音勢結構」『民族語文』一九八九年第一期 (總第五十五期) 28-36
- 孫竹主編 (1985) 『蒙古語族語言詞典』青海民族出版社
- 照那斯圖編著 (1981) 『土族語簡誌』中国少数民族語言簡誌叢書 民族出版社
- 照那斯圖編著 (1981) 『東部裕固語簡誌』中国少数民族語言簡誌叢書 民族出版社
- 仲素純編著 (1982) 『達斡爾簡誌』中国少数民族語言簡誌叢書 民族出版社
- 武達 (1983) 『巴爾虎土語話語材料』蒙古語族語言方言研究叢書 002 内蒙古人民出版社

(2001.5.31 受理)